HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	五大湖をわたるCZの風 : クリーブランドのコースタルゾーン01
Author(s)	敷田, 麻実
Description	国際会議報告
Citation	沿岸域, 14(2), 39-41
Issue Date	2002-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/34938
Type	journal article
File Information	1168.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

国際会議報告

五大湖をわたるCZの風：クリーブランドのコースタルゾーン01

金沢工業大学　環境システム工学科
敷田麻実（しきたあさみ）

コースタルゾーン（Coastal zone）は2年に1度世界の沿岸域関係者が集う一大イベントである。第1回目の会議がサンフランシスコで開催されてから、1年ごとに米国各地で開催されている。会議は開催年度を後ろにつけて呼称され、2001年にクリーブランドで開かれた通算で12回目の会議はCoastal zone 01だった。

Coastal zone はアメリカはもとより世界各地の沿岸域関係者が広く集う場で、並行して開催されるワークショップなどを含めると、毎回1,000-2,000人が参加する沿岸域関係者の国際会議でもある。一般にはCZ(シージー）と呼ばれることが多く、特にアメリカの沿岸域関係者にとっては、研究者や実践者同士が最先端の沿岸域研究や実践に関する情報を交換する場となっている。

さて、筆者は2001年7月15日から19日まで米国北部の都市クリーブランド（Cleveland）で開催されたCZ01に参加し、多様な沿岸域研究や実践的活動の事例に接することができた。そこで、日本沿岸域学会会員に対し最近の沿岸域研究や実践の動向を含めてCZの魅力を伝えることで、メリーランド州のボルティモアで開かれる予定のCZ03への参加のお誘いとしたい。

(1) クリーブランド

今回CZが開かれたのは、五大湖の1つエリー湖に面したオハイオ州の都市クリーブランドである。クリーブランドは人口が約50万人、コロンバスに次ぐオハイオ州第２の都市であり、シカゴとニューヨークの中間に位置する同州の中核都市である。

クリーブランドの特徴はまずエリー湖畔の都市だという点であろう。世界の淡水の20％を擁する五大湖のうちで4番目に大きいエリー湖は、セントローレンス水路をへて大西洋と結びつき、内陸へ大量の物資を運ぶ優れた運搬路でもある。

湖としてのエリー湖は、25,667km²の広大な湖面を誇る内水面で、アメリカとカナダが二分して保有している。五大湖の他の湖に比べると水深は20m程度と浅いが生産性は高い。緯度が高い地域に位置するので、冬期には湖面の75％が凍結する。

エリー湖に関する最近の問題としては、移入種であるゼブラマッセルの爆発的繁殖がある。1919年にこの貝がヨーロッパから侵入したことで、現在では生態系の根幹を揺るがすような深刻な変化がエリー湖に起こっている。

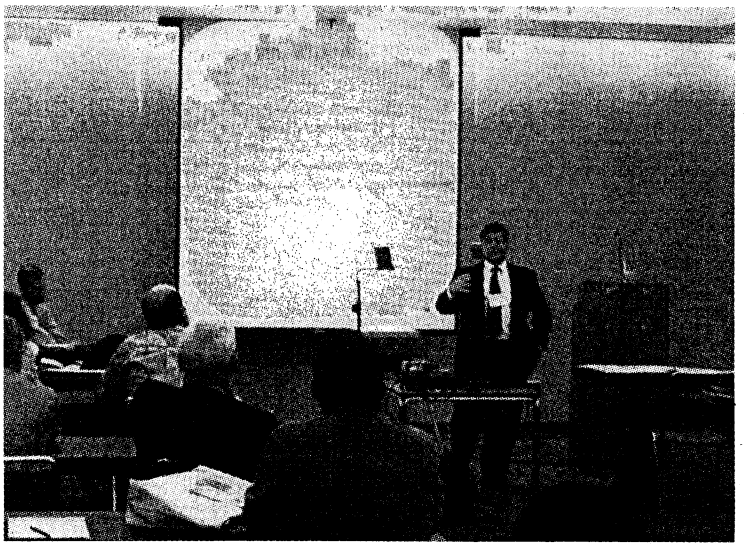
写真－1　CZのオープニング・セッション

(2) 会議点描

CZには誰でも参加できる。もちろん発表についても極力排除しないので、口頭発表・ポスターとも内容の多様性が高く、沿岸域に関するさまざまなテ

ーマのショーケースである。もちろん学術的に高度な発表も含まれるし、非常に実践的な管理の内容について触れることもできる。このような「多様性」がCZの特徴の第1であろう。

次にNPOやNGOの発表の活発さが挙げられる。NPO・NGOは、結果が出ていてもいなくても、堂々と自分たちの実績を示しているし、それがまた研究だけの発表より興味を引く。彼らとしても活動の成果を関係者に示して、今後の支援や連携のために人脈や評判を獲得するチャンスであり、当然力が入るのだろう。こうした積極的な姿勢が、そのままアメリカの沿岸域関係者コミュニティの底上げにつながっていると思われる。



写真ー2　アクティブマネジメントのプレゼン

しかし、1日に1,200人あまりが参加するCZは、セッションも複数並行して進められ、加えて関連官業界やNPO・NGOの展示ブースも多数設置される大がかりなものなので、沿岸域管理に関する「お祭り」のような雰囲気があり、初回の参加などは、ただうろうろして終わってしまうことも事実ある。興味あるセッションが同時に進行するため、一方の発表を聞き逃してしまうことも多く、あるいは参加者の関心があまりに広範なため焦点がぼやけたり、質問のレベルがまちまちだったりする支障もある。しかし、世界の沿岸域で起きつつある問題や、その解決について最新の取り組みを学べることは大いに意味がある。

例えば、今回のセッションで特徴的だったのは、マネージメントに関する議論が複数のセッションで行われたことである。特に最近注目されているエコシステムマネージメント、アダプティブマネージメント(adaptive management)は、そのテーマだけのセッションが組まれており、沿岸域でもこのような管理に関する議論が高まっていることを示している。前回のCZ99ではこのようなセッションがなかったことを考えると、ここ2年間で急速に浸透し始めているのであろう。もっともDecision making tools for coastal managementのセッションでは、アダプティブマネージメントが沿岸域管理に果たす役割について懐疑的な発表「Adaptive mana-gement: great tool, or just another slogan?」もあり、陸域生態系で導入が進んでいる管理を沿岸域に応用する是非の議論はまだしばらく続くのではなかろうか。

そのほか、注目されたのはMPA(marine protected areas)に関する議論の増加である。特に生態系保全やコミュニティによるMPA管理には参加者の関心が高く、セッションはほぼ満員で盛況だった。今後、沿岸域の保護区の活用や導入に関する研究や実践は、沿岸域管理の政策や手法と並ぶ中心的話題になってゆくだろう。

養殖についても持続可能な養殖業のあり方を問う発表もあり、沿岸域に関する研究・実践は「環境シフト」の中で、さまざまな試みが議論される段階であることがわかる。このようにCZは世界の沿岸域の流れをつかむ場としても有効である。

(3) ワークショップ

CZの開催と並行していくつものワークショップが毎回開催されている。研究・技術中心のものや実践的なものなど内容はさまざまだが、いずれも発表会場以上に参加者と交流できるのが特徴である。

私は多数開催されたワークショップのうち、「Human dimentios in coastal management: tools and techniques」を選んで参加した。ワークショップへの参加に特別な制限はなく、わずかな参加費で参加できる。

会場は満員で、立ち見まで出るほどだった。最初に全体説明があって、それに続いて講師の巧みな誘導でグループワークが進む。このワークショップは、沿岸域管理の担当者になった場合にどのように利用者を管

理するかがテーマで、さまざまな課題に関してグループで回答をまとめてゆく。時間に制限があり、またグループ間で競うので、大学院の演習に参加したような緊張感がある。短時間ながら、他の参加者と相談しながら進める作業を通じて知る他の沿岸域での事例や知恵は、興味深く役立つことが多い。こうしたワークショップへの参加はぜひお勧めである。

写真－3　フィールドトリップのボランティア講師

(4) フィールドトリップ

CZではフィールドトリップが楽しみである。私が参加したのは、「Headlands Beach State Park, State Nature Preserve and Mentor Marsh State Nature Preserve」と銘打ったフィールドトリップである。この種のフィールドトリップは各開催地の主催者が準備するいわば「スタディツアー」であり、事前に参加を申し込む仕組みになっている。費用はわずか10ドル。これで観光ルートではない「地元の穴場」を半日案内してもらえるので、文句のあろうはずはない。

ツアーでは、湖岸にある州立公園や湿地保護区を訪問した。海外に限らず、アメリカ国内の他の州からの参加者も多い。そして地元の研究者や公園のレンジャーが、ボランティアの解説者として、半日つきあってくれる。地元ならではの体験に基づいた説明に説得力があるのはもちろんのこと、実際に現地を見ることができる楽しいガイド付きツアー、エコツアーであった。

エリー湖畔の州立保護区では、エリー湖の環境やその生態系に関する問題、普段の管理の問題点についての実感がこもった説明が好評であった。湖岸の浸食、農地からの排出による富栄養化問題、ゼブラマッスルの被害など、湖岸の保護区を歩きながら説明が続く。もちろん参加者は遠慮なく質問するし、それに加えて参加者同士の体験談の交換が興味深い。そのため、ツアー参加中に知り合いができることも多い。今回のツアー中にはイギリスの沿岸域研究者と沿岸域管理に関する教育プログラムでじっくり意見交換ができた。

フィールドツアーもCZではお勧めの行事である。

(5) アジアと日本人の参加

1993年にニューオリンズで開催されたCZ93では、日本特集が組まれた。しかし日本からの参加はその後必ずしも活発ではなく、ここ2回の会議では日本人と会うことはまれといってよかった。それと対照的に、参加も発表も活発なのは、韓国・中国をはじめとするアジア各国の沿岸域関係者である。自国の沿岸域について、またその問題点や対策について積極的な発表を続けている。こうしたポジティブなアピールは、他国の沿岸域関係者の理解を得るばかりではなく、それをもとに共通の課題について議論できるチャンスも作り出す。日本特集ではなくとも、このような場で日本の沿岸域に関する話題の提供ができれば、アジアの中で日本の沿岸域が世界の沿岸域管理の場から取り残されることは防げるのではないか。

そこで改めて、沿岸域学会の会員に次回のCZ03参加を呼びかけたい。CZで日本の沿岸域に関する研究や分析・実践を提案して共通の土俵で議論する中で、新たな知恵が出ることも多いのではないだろうか。会員各位の積極的な参加を期待したい。